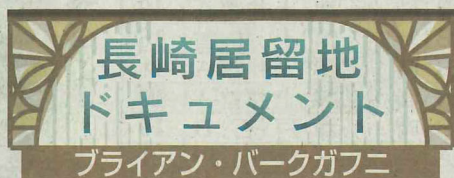


経済発展に大きく貢献

明治43(1910)年頃の長崎在住外国人の集合写真(部分)。カール・ボーディングハウスは、右端に座る黒い帽子と白いひげの男性。元日本郵船の船長ウィルソン・ウォーカーは左端に座っており、その後ろは倉場富三郎(カラー加工、筆者蔵)



35



ドイツ人豪商ボーディングハウス

カール・エルンスト・ボーディングハウスは1834年、ドイツのデューセルドルフ市近郊で生まれた。文久元(1861)年、中国に渡り、広東のドイツ系企業に就職したが、その2年後、長崎に渡り、出島に



明治31(1898)年発行の英字新聞「ナガサキ・プレス」に掲載された船舶広告。ボーディングハウス商会は、数社の欧州海運会社の代理店を務めていた

あるプロイセン系の貿易会社テクストル商会に事務員として雇われた。これは、ボーディングハウスの半世紀以上にわたる出島滞在の始まりだった。明治3(1870)年、彼はもう一人のテクストル商会従業員と手を組み、出島9番地においてボーディングハウス・デットマー商会を設立し、長崎を代表する国際ビジネスリーダーとして頭角を現す。さらに、明治12(1879)年に独立を宣言し、ボーディングハウス商会を開設して事務所を出島7番地に移し、貿易商人として、また多くのヨーロッパ系保険会社や海運会社の代理店として成功を収めた。明治30(1897)年、出島7番地の区画と建物をフレデリック・リンガーに譲渡し、活動の場と住居を出島4番地に移した。

リンガーは古い建物を取り壊し、出島7番地に木造2階建ての擬洋風建築を建てた。長崎内外倶楽部が借

カントを日本に紹介

り受け、太平洋戦争が始まるまで社交場として使用されたこの建物は現在、国指定史跡「出島和蘭商館跡」の施設の一部として保存活用されている。

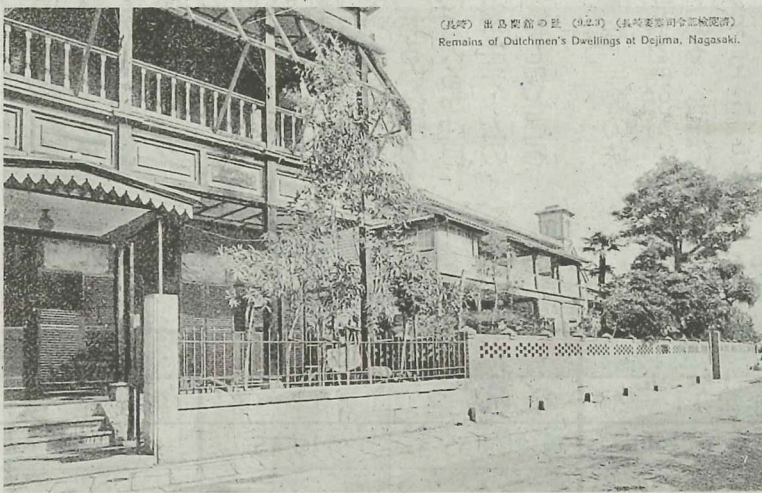
ボーディングハウスは、明治7(1874)年にエリザベス・クライというドイツ人女性と上海で結婚し、4人の子供をもつた。天折したもう一人を含め、子供たちは全員出島で生まれている。

長期滞在したボーディングハウスは、長崎の経済発展に大きく貢献しただけでなく、西洋哲学を日本に紹介したことで知られている。文久3(1863)年に来崎したとき、彼は高名

なドイツの哲学者イマヌエル・カントの図書を携えていた。日本に最初にもたらされたカントの著作といわれるこの図書は、後に長崎高等商業学校の教授、武藤長蔵の手に入り、カント哲学の初期研究の参考書として使用された。現在、長崎大学付属図書館に保存されている。

熱心な登山家でもあったボーディングハウスは晩年、生涯の願いであった富士登頂を果たした。大正3(1914)年、彼は出島の自宅で息絶え、坂本国際墓地に埋葬された。享年80。当時、子供2人はドイツに、1人は天津に、1人はシベリアに住んでいたが、未亡人のエリザベスは愛着ある出島の邸宅に住み続けた。

第1次世界大戦が勃発したのはその5カ月前のこと、日本とドイツは戦争状態に陥り、ドイツ人住民は日本の敵とみなされていた。しかし、ボーディングハウスの葬儀には長崎県知事の李家隆介をはじめ、多くの日本人の友人が参列し、最後の尊敬と感謝の意を表した。一方、妻エリザベスは翌年11月に退去命令を受け、日本を離れることを余儀なくされた。その後の消息は不明である。



(長崎) 出島和蘭館の跡 (9.2.4) (長崎県立総合資料館蔵)

昭和初期の絵葉書には、出島7番地の長崎内外倶楽部の特徴的な玄関がクローズアップされており、右側に旧出島神学校などの明治建築が写る(筆者蔵)

(グラバー園名誉園長)

月1回掲載します